

恐れるな、語り続けよ

パウロのコリント伝道、このギリシャの大都市における一年六ヶ月の長期にわたる伝道は成功だったと思われる。しかし、コリント伝道は決して平穩無事に行なわれたのではない。後に書かれたコリントの信徒への手紙によれば、そのときのコリントにおける自分の心身の状況をパウロは、「わたしは衰弱していて、恐れにとりつかれ、ひどく不安でした」と述べている（第1コリント2:3）。

彼自身が「肉体のとげ」と呼んでいる辛い持病を抱えての長期にわたる伝道旅行の疲れだけでなく、迫害の中にあるマケドニアの諸教会についての心配事があり、それに加えて、福音を頑に拒むユダヤ人同胞からの継続的な迫害と反対があった。そういう厳しい困難の中でコリント伝道は行なわれたのである。そのような中であって彼の支え及び励ましとなったものは何か。

前回学んだように、第1は、神の絶妙なタイミングの中で起ったアキラとプリスキラ夫妻との出会いである（1節）。パウロが助けと慰めを必要としているとき、神は彼のためにアキラとプリスキラという素晴らしい夫婦を備えておられた。コリント伝道においてアキラ夫妻の果たした役割は計り知れないものがある。

第2に、マケドニアの教会からもたらされた吉報と援助である。シラスとテモテがマケドニアからコリントのパウロのもとに下ってきたとき、彼らはテサロニケの信徒たちが迫害の中で信仰を守り通しているという吉報とともにフィリピの教会からの支援金を携えてきた。それはパウロの伝道の働きを支えるためのフィリピの信徒たちからの心のこもった献金であった（第2コリント11:8, 9, フィリピ4:15以下参照）。そしてそれはパウロをどんなに慰めたことであろう！

第3に、激しい反対と迫害の中でパウロの励ましとなったのは、幻の中で聞いた主の激励の言葉であった。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加えることはない。この町には、わたしの民が大勢いる」（9, 10節）。何と励ましに満ちた言葉であったことか。

この言葉は旧約聖書にある預言者エリヤの物語を思い起こさせる。悪王アハブと王妃イゼベルの宗教的墮落と戦い、そのために命を狙われて絶望のあまりホレブの山まで逃亡したエリヤに、主は言われた。エリヤよ、なぜ絶望的な叫びをあげるのか。わたしはイスラエルのうちにバアルに膝をかがめない七千人を残しておいた、と。この言葉に勇気を与えられて、エリヤは再び立ち上がっていく（列王記上第19章）。

パウロもまた困難な唯中でそのような激励の言葉が与えられた。神が共におられるという事実、道徳的に腐敗し、金と愛欲と偶像に満ちたこの町にも神の民がいるという事実、この神の恵みの事実を知ったればこそ、困難の中で一年半もコリントに留まって、福音を語り続けることができたのである。

今日の「コリント」であるワシントンでも同じことが言える。およそ宗教とは縁のない政治と情報の都であるワシントンにも神の民がいる。そして神の御心にかなう者が次々に起こされて救われていく。このビジョンに私たちは励まされ、たとえ困難の中でも、忠実に福音を伝えていくのである。